

# 中古文学会 2021 年度春季大会

**大会プログラム** \*すべてのイベントをリアルタイム中継型 (Zoom 使用) で実施します。

5月22日 (土)

15:00-16:00	2021 年度 第 1 回委員会
-------------	------------------

5月23日 (日)

09:30-09:40	開会の辞 中古文学会代表委員 久保 朝孝
09:40-10:20	研究発表会 『源氏物語』における人物の美的表現「きよら」「きよげ」再考 同志社女子大学〔院〕 岸 ひとみ ……休憩 (10分) ……
10:30-11:10	『源氏物語』の欠如と余剰—国冬本源氏物語句宮巻と『雲隠六帖』の関係を中心に— 大東文化大学〔非〕 越野 優子 ……休憩 (10分) ……
11:20-12:00	『源氏物語』浮舟の「手習」の諸相 学習院大学〔院〕 増田 高士 ……休憩 (60分) ……
13:00-13:10	大会企画 シンポジウム「リベラル・アーツとしての古典研究の可能性」 趣意説明・ディスカッサント 神奈川大学〔教〕 深澤 徹
13:10-13:35	基調報告1 「“発見の物語”を越えて」 明星大学〔教〕 前田 雅之
13:35-14:00	基調報告2 「古典の翻案の可能性—実践者の立場から」 川村学園女子大学〔教〕 千野 裕子
14:00-14:25	基調報告3 「これからの日本古典籍研究のビジョンをめぐって」 早稲田大学〔教〕 河野貴美子 ……休憩 (30分) ……
14:55-16:00	討議・質疑応答 〈司会〉桐朋女子高等学校音楽科〔教〕 西野入篤男 ……休憩 (20分) ……
16:20-16:50	2021 年度 定例総会
16:50-17:00	閉会の辞 中古文学会代表委員 久保 朝孝

\*〔教〕専任教員、〔非〕非常勤教員、〔院〕大学院学生

## 研究発表要旨

### 『源氏物語』における人物の美的表現「きよら」「きよげ」再考

同志社女子大学〔院〕 岸 ひとみ

『源氏物語』における「きよら」「きよげ」という語句は、従来から、会話文・心内文・地の文・草子地を区別せずに、主としてそれらの語に隣接する語句や、どの人物に対して使用されているかに着目して論じられ、両語を血統や身分で区別して、「きよら」を一級の美として「光源氏型」、「きよげ」を二級の美として「頭中将型」とであると捉えるのが定説となっている。

しかし、会話文では、話し手が聞き手を意識して意図的に使用されることが多い。語り手が「きよら」「きよげ」と記す場合は、物語の中で客観的なものであるが、登場人物がそのように感じた場合には、その人の思いが入り、主観的なものとなる。

そこで、本発表では、人物に対する「きよら」「きよげ」という美的語彙を、会話文以外において、語り手を含む、そのように表す人物の視点を基準に論じることを試みる。語り手が「きよら」「きよげ」をどのように描き分け、作中人物の主観がいかなるものであるか。「きよら」の人に対して「きよげ」、「きよげ」の人に対して「きよら」と形容されている、例外的使用の美的語句がどういう意味を持つのか。

「きよら」には、絶対的「きよら」と相対的「きよら」が存在し、「きよら」という語は、単なる美的語彙にとどまらず、語り手視点の「きよら」には、物語を展開に影響を与える力があり、作中人物視点では、その人の心を動かしていく機能を持つことを明らかにしたい。

### 『源氏物語』の欠如と余剰—国冬本源氏物語句宮巻と『雲隠六帖』の関係を中心に—

大東文化大学〔非〕 越野 優子

作者自筆本の無い『源氏物語』において、現在読んでいるものはあくまでも『源氏物語』と認定されているものに過ぎない。さてこの物語の従来の研究のあり方を振り返ると、本文研究の視点の範囲は『源氏物語』それ自体の枠内に留まり、続編・外伝等は中世物語研究の枠内で行われてきたのが大方の傾向であった。但し加藤昌嘉が「作中人物の連関があれば、すべて『源氏物語』と認めてよい」(注1)と述べた如く、如何なる組み合わせもその連結する証拠があれば可能となると考える。

この度発表者は作品内外の枠を取り払い、『源氏物語』の別本・国冬本と続編的な作品『雲隠六帖』(室町期成立・作者未詳)について、前者(国冬本)の欠如と後者(『雲隠六帖』)の余剰を本格的に考察したい(注2)。「幻」巻巻末「ついたちのほとの事つねよりことなるへくときてさせ給みこたち大臣の御ひきいて物しな／＼のろくともなとになうおほしまうけてとそ」(国冬本)に続き「句宮」巻冒頭で始まらない国冬本『源氏物語』と、題名だけでなく「かくてむ月の御ころおきてなど」(「雲隠」巻)以降の世界をもつ『雲隠六帖』が織りなす世界について論じ、『源氏物語』のもつ豊かな可能性を問いたいと考えている。

注1 加藤昌嘉(2011)「散逸「巢守」巻をめぐる」『揺れ動く源氏物語』勉誠出版,244p

注2 越野優子(2020)「『源氏物語』と異本」(『ユリイカ』No.767,vol.52-15)で概要を一部述べた。

## 『源氏物語』浮舟の「手習」の諸相

学習院大学〔院〕 増田 高士

『源氏物語』には手習する女性たちが登場するが、その中でとくに印象的なのは紫の上と浮舟であろう。紫の上は「若菜上」巻において、「古言」を書き綴る形で手習する場面がある。浮舟については古注釈以来の「手習の君」という呼称がその重要性を物語っている。

先行論においても、両者の手習が取り上げられることが多く、紫の上の手習の延長上に浮舟の手習を位置付ける論がある。たしかに両者は自身の抱えるもの思いを手習するという点が共通するものの、両者の手習の様相を同質のものとして架橋することが適切であろうか。「若菜上」巻の紫の上の手習は、自身が抑圧した不安や苦悩を手習の方が却って正直に教えてくれたというものであったが、浮舟と手習との関係は紫の上のそれとは異質ではないだろうか。

本発表ではこのような問題提起をした上で浮舟の手習を主に扱うが、手習した人物と書かれたものとの関係に注目しながら考察する。具体的には、「浮舟」巻、「蜻蛉」巻、「手習」巻の三巻でそれぞれ異なる浮舟の手習の様相を検討する。浮舟は「浮舟」巻で自身の「身」を「憂し」と意識することが多く、そのような意識との関連を手がかりにして手習を分析する。それをふまえて「蜻蛉」巻、「手習」巻の手習にはどのような特徴があるのかについても検討する。紫の上との相違点を指摘することとどまらず、浮舟の手習の固有性を明らかにしたい。

## 大会企画 シンポジウム 「リベラル・アーツとしての古典研究の可能性」

趣意説明・ディスカッサント	神奈川大学〔教〕	深澤 徹
基調報告 1	明星大学〔教〕	前田 雅之
基調報告 2	川村学園女子大学〔教〕	千野 裕子
基調報告 3	早稲田大学〔教〕	河野貴美子
討議	〈司会〉桐朋女子高等学校音楽科〔教〕	西野入篤男

### 〔趣意〕

本シンポジウムは、中古文学研究の立場からする、「古典」とは何かについての根源的な問いかけを意図している。「古典」は「古典」として既にあるのではない。それを「古典」として維持し、継承していく人びとの、たゆみない努力なくして「古典」は「古典」たりえない。この自明の事柄を、いわゆる「リベラル・アーツ」の営みとの関連で明らかにしていきたい。

「一国二制度」に基づく高度な自治を否定されてしまった「香港」や、独裁的な権力者による言論弾圧のいまだ続く「ベラルーシ」の事例に見てとれる昨今の国際情勢にかんがみ、自由平等の「市民社会」を今後とも維持していくためには、いわゆる「リベラル・アーツ」がどうあっても欠かせない。「表現の自由」と「基本的人権」を根幹にすえる民主主義社会を今後とも死守し、次世代へと継承していく上で、その重要性は、ますます高まる。

にもかかわらず、「リベラル・アーツ」の必要性に対する意識は、ここ日本では極めて低調である。1991年の「大学設置基準」の大綱化以降、教養教育課程（一般教育課程）の軽視と、その削減の動きが、各大学で進行した。日本の高等教育機関（大学）において、従来「リベラル・アーツ」の役割を担ってきたのは「教養学部」や「文学部」、「文理学部」や「人文学部」などであった。だが、そうした「リベラル・アーツ」を主体的に担う学部は、時代のニーズにこたええないとして次々と改組される傾向にあり、国公立大学に至っては、教員養成系や人文・社会系の学部の廃止までが取りざたされている。カントのいう「諸学部の争い」さながら、教養教育課程の諸機能は、いままさに解体の危機にさらされている。そうした趨勢にあらがって、「リベラル・アーツ」の重要性について、さらなる注意喚起を行う上で、本シンポジウムは大いに資するところあるものと自認する。

まず確認しておきたいのは、近代以前の古文（古典語）で書かれた、過去の古いテキストだから「古典」なのではない。時代を問わず、地域を問わず、古今東西にわたり普遍的な価値を有するものが「古典」なのである。ただし、自由と民主主義、さらにはリベラル・アーツそれ自体をも含めて、なにをもって普遍的価値とするかは立場によって異なる。かくして〈正統〉と〈異端〉、〈真理〉と〈虚偽〉、〈正義〉と〈不正義〉、〈美〉と〈醜〉などをめぐってのイデオロギー闘争のアリーナとも「古典」はなりうる。そうした「古典」をめぐるヘゲモニー争いの熾烈なバトルに積極的に参画し、キリスト教文化圏の西欧や、儒教文化圏の中国に依存するのではない、日本発の「古典」を、どのように立ち上げていったらいいのか。

については広く世界の趨勢を視野にいれ、その動向を多分に意識しての、活発な議論の展開されんことを、本シンポジウムにおいて大いに期待したい。

[文責：深澤徹]